

(B) 活動・研究助成金 報告論文

William Faulknerの*Go Down, Moses*における 人種、性、補償

萱場 千秋

Key Words アメリカ文学、ウィリアム・フォークナー、人種、奴隷制、補償

はじめに

本稿は、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の『行け、モーセ』 (*Go Down, Moses*, 1942) を¹、作品の社会的背景を補助線としながら詳細に分析することで、著者の人種とジェンダーに対する感受性の検証を行うものである。よって本稿では、奴隷制時代、および、ポストベラム期の黒人キャラクターにまつわる性の問題を中心とした表象分析を行うが、それを読み解くにあたり、この小説最大の主題となりうる、奴隷制の補償という問題に着目する。

本作において、白人農園主は、奴隷女性に産ませた黒人の息子に「遺産」を供与することにより、奴隷制下での搾取の解決を図ろうとする。しかし、「再生産」という非人道的な経済活動によって生み出された黒人奴隷とその子孫たちは、「遺産」の受け取りを拒否する。諏訪部浩一によれば、「見捨てられた子供達」に「償いの金」を拒否させた同小説の現実認識は、その後出版される南部の人種問題を告発した古典の書に比べても²、遥かにラディカルなものだったという (諏訪部, 2017: 269)。つまりフォークナーは、再建期以降も引き続いた米国の不平等なシステムに対す

る経済的補償の無力さを見抜き、異人種間の金銭授受を描くことによって、それを物語化したのである。

『行け、モーセ』に提示された奴隷制の補償についての問題は、近年、アメリカで再び問われ始めている。民間では、2000年以降、奴隷の子孫だという黒人が、奴隷貿易に関わったことのある有名企業に次々に賠償請求し、政界では、民主党の大統領予備選挙へ出馬しているバーニー・サンダース (Bernie Sanders) が、奴隷制の被害者への補償を検討すべき事案であるとして議論を重ねている。歴史的事実に鑑みれば、人種を利用した悪しき制度の存在は明白な事実であるため、アフーマティブ・アクションを始めとする様々な是正措置が、これまでも行われてきた。しかし、奴隷解放150年という時を経て異人種間の血縁関係や親密性が形成されてきた現在、この問題は、もはや一面的な立場からの措置では解決不可能な領域に至っている。

第3代アメリカ大統領のトマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) と、彼の黒人の妾だと言われてきたサリー・ヘミングス (Sally Hemings) の関係を例に挙げよう。奴隷解放論者であったジェファソンは、奴隷所有と再生産の利潤を認識し、

し、それに依存していた³。ユージーン・フォスター (Eugene Foster) の遺伝子レベルの科学的な調査から、彼らが混血の子孫を多く残していたことがほぼ確実であることを考えれば⁴、彼らの性関係は、主人であるジェファソンから、奴隷であるサリーへの性搾取であったと見なすことができる。しかし、彼らの間に生まれていたかもしれない愛情と、抑圧者と被抑圧者、両者の血を受け継ぐ子孫の存在は、時代を経るごとに、この問題の解決を難解にしていっていった。文学の領域では、バーバラ・チェイス＝リブー (Barbara Chase-Riboud) の『サリー・ヘミングス』(Sally Hemings, 1979) や、スティーブ・エリクソン (Steve Erickson) の『Xのアーチ』(ARC d'X, 1993) が、ジェファソンとサリーの関係を、限りなく真実に近い、しかし、虚構の物語として描き出している。その中で作家たちは、異人種間の関係性の主体と客体の入り交じる状況について、問いを投げかけている。『行け、モーセ』は、事実を基にしたこれらの歴史小説に引けを取らない、ともすれば、それ以上に歴史的事象を多面的に捉え、奴隷制とそれ以降の人種とジェンダーにまつわる複雑な問題を描く作品である。本稿では、自己省察的な歴史認識を持ち、同小説を自らの黒人乳母に捧げたフォクナーが⁵、南部農園における経済的、性的搾取のメカニズムと、それに伴う「補償」の問題を描き出した意義を、経済の側面から詳らかにしていきたい。

1. 『行け、モーセ』に描かれた「補償」の問題

本章ではまず、『行け、モーセ』に描かれる、奴隷制時代に形成された「家系」の問題と、それによって出来た「補償」の問題について考えていきたい。新納卓也は、『アブサロム、アブサロム!』(Absalom, Absalom!, 1936) で「家系の暴力性が発生する仕組みを描ききった」後、フォク

ナーは「子孫が自身の問題ぶくみの家系に対していかに責任をとるのか」ということに関心を移したと論じている(新納, 2017: 79-80)。『行け、モーセ』の物語の中核にある南部農園の異人種間の血縁関係の成立を詳らかにしつつ、同小説からいかにして「補償」の問題が読み取れるのかを考えていきたい。

1810年、南部農園主であったキャロザーズ・マッキヤスリン (Carothers McCaslin) は、650ドルで購入した奴隷女性のユーニス (Eunice) に⁶、トマシナ (Tomasina) という娘を孕ませる。さらにキャロザーズは、トマシナを「父」ながら犯し、トミーズ・タール (Tomey's Turl) という混血の男児を再生産した。当時のヴァージニア州法では、子の身分は母のそれに従っていたため、白人農園主を父に持つトマシナやトミーズ・タールも、キャロザーズの「子供」ではなく、農園の「動産」であった。トマシナには黒人の結婚相手があてがわれ、トミーズ・タールは名義上、トマシナとその黒人男性の子供であると見なされた。その結果、事実上はマッキヤスリン家と血を分けながらも、一家の正式な家系図には示されない、黒人家系のビーチャム (Beauchamp) 家が誕生したのである。

奴隷制廃止前、キャロザーズは、トミーズ・タールに1000ドルの「特別措置」を与えるという遺書を残して死んでいく (Faulkner, 1990: 102-3)。しかし、トミーズ・タールは、遺産を請求せずに死んでいったため、その金は、1人につき1000ドルへと増加され、彼の3人の子供たちへと継承される。さらに1883年、キャロザーズの白人の孫であるアイザック・マッキヤスリン (Isaac McCaslin) は、16歳のとき、農園台帳に記録されたビーチャム家の起源を知り、罪責感に苛まれる。みずからが当主となって遺産相続する際に、その恥辱の歴史をも受け継がねばならないと考えたアイザックは、トミーズ・タールの3人の子供に、祖父の遺産を与えようと奔走する。つまり、マッキヤスリン家の代々の白人農園主が考える「弁済」は、奴隷制時代の経済的・性的搾取に

よって築かれた遺産の一部を、血縁関係にある黒人に補償金として還元するという方法であった。

『行け、モーセ』では、このような白人の償いの行為に対して、ビーチャム家の黒人たちが、「遺産」の拒否という形で、その補償金、つまり、「弁済」に抵抗する様子が描かれている。同小説で前景化されている補償の問題点は、フォークナー研究者によって、主に2つの局面から論じられてきている。1つ目は、サディアス・デイヴィス (Thadious Davis) が指摘するように、黒人奴隷と彼らの労働力を切り離すことによる、遡及的な経済的補償の欺瞞性である。奴隷制廃止直前、同制度の擁護論者の間では、奴隷は白人の所有物ではないが、奴隷の「労働力」は白人の所有物であるという言説が生み出された。それは、奴隷の身体に加えられた危害を否定し、彼らの労働におけるエネルギーのみを奴隷制と結びつけることで、人間の身体から奴隷制を切り離そうとする試みだった (Davis, 2003: 86-7)。作中、農園外には職も財産も持たないトミーズ・タールが、キャロザーズの遺産を請求しないのは、性搾取された彼の母や祖母のような奴隷女性に生み出された自分を、「賃金労働者」の類似物と見なすことの理論的、そして倫理的な欺瞞を見抜いているからだろう。つまり、フォークナーが黒人キャラクターのふるまいによって示唆しているのは、キャロザーズの遺産供与は、彼の性的搾取を同意の上での等価交換へと書き換えてしまう、白人本位の「償い」であるということである。

2つ目は、「遺産」を継承したトミーズ・タールの3人の子供が1000ドルを拒絶するさまに込められている、歴史的問題の解決の困難さである。奴隷制という長期にわたる制度的暴力においては、補償を受ける黒人は、搾取を受けた奴隷本人ではないし、補償を与える白人もまた、制度と直接的な関わりを持ったことのない人間である。平石貴樹によれば、1867年生まれのアイズックは、「南部の歴史を自分に引きうけようと」するものの、その行為は「過去と自分とが関係づけられていることをみとめることにとどまり」、彼は「南部の

歴史の意味を理解するわけではない」という (平石, 1993: 267)。作中、アイザックは、彼なりに真剣に試行錯誤するが償いの方法に行き詰まってしまう、結局、家長としての相続権を放棄している。このような筋書きは、経済的補償で歴史的問題の後処理を終えることは不可能だということに、フォークナーが気づいていたことを示しているように思われる。

このように、『行け、モーセ』には、黒人奴隷から労働力のみを切り離すことで奴隷制を経済的に解決することの欺瞞性、また、すでに歴史化されてしまった過去の搾取を、白人の一方的な理解から解決することの不可能性が示されている。歴史と経済の観点から奴隷制の解決の困難さを見抜いていたフォークナーは、『行け、モーセ』の中に、抑圧者である白人と、被抑圧者である黒人、両方の立場を踏まえて、その「補償」の問題を物語化しているのである。

2. ポストバラム期南部農園の経済と性の問題

本章では、『行け、モーセ』に緻密に描かれる南部農園の経済循環を分析することによって、ポストバラム期における搾取のメカニズムの継続を、歴史的事実を概観しつつ説明していく。その搾取へ抵抗する黒人男性、ルーカス・ビーチャム (Lucas Beauchamp) の経済活動の中に浮き彫りにされるのは、彼の妻、モリー・ビーチャム (Molly Beauchamp) の白人家庭での労働である。作品横断的な比較を行いつつ、南部農園の継続的な人種体制によって形成された、「家族」に準ずる複雑な異人種関係を明らかにしたい。

1 | 農園の経済メカニズム

再建期の南部では、プランテーション制度に代わる農園システムが出現する。本田創造によれば、それは、「プランターの大土地所有を解体す

る代りにそれを温存し、その一部を黒人や貧しい白人に借地させ、かれらを昔ながらの状態に押しとどめておくことを目的にした前近代的な制度」だった(本田, 2000: 140)。農園外に生活の保障のない解放民は、不本意ながらもその隷属状態に身を置き続け、農園主の生活を支えていた。奴隷制廃止後、黒人たちは自身の財産を所有することが法的に可能になるが、『行け、モーセ』の多くの場面には、黒人の資産が白人家長の管理下へと吸収されていく様子が描かれている。その詳細な経済循環の描写は、本田が示した歴史的構図に呼応するものである。本節では、ポストベラム期の人種と性の問題を論じる前段階として、1940年代も依然として存在していた農園の経済搾取のメカニズムを明らかにしていく。

まず、農園経済を特徴づける重要なアイテムとして、「売店」(commissary)と「台帳」(ledger)が作中に頻出していることを押さえておきたい。「売店」は、農園の「みぞおち」に例えられ、農園内で公に把握された金銭や物品の全てはそこを通過する(Faulkner, 1990: 244-45)。そして、その経済循環の記録が詳細に記載されるのが、「台帳」であり、これはいわば、農園経済の歴史書である。この2つのアイテムは、現代の感覚で言えば、「銀行」と「通帳」と捉えられるだろう。マッキヤスリン農園において、長年台帳を専有し、奴隷制廃止後も農園の動産と不動産の記録を行ってきた白人農園主は、黒人たちの日々の生活を把握し続けている。本作2つ目の物語、1941年を舞台とする「火と暖炉」の第2章と第3章は、農園主が売店で台帳を記入するという象徴的な構図で始められているが、それは、その時代もなお、白人家長が農園経済の事実上の管理者であったことを示している。

次に、「売店」運営と「台帳」記入からなるシステムが、奴隷制時代とそれ以降、変わらずに機能していることを、2人の黒人の労働賃金の比較から分析したい。奴隷制時代、シューシダス(Thucydus)は、奴隷ながら賃金を支給されていた。しかし、その賃金は、労働者本人に与えられ

ることなく売店に蓄積されていき、帳簿上の蓄積金額の中から、彼が購入した食料や日用品の代金が差し引かれていく(254-55)。言い換えればこれは、シューシダスの生活が、貨幣を媒介とした農園外での交換行為に関与することなく、マッキヤスリン農園の中だけで完結していることを意味する。

しかし、農園奴隷に自立した経済活動が許されなかったことは歴史的事実としても明らかである。ここで興味深いのは、1940年代を生きるルーカス・ビーチャムの財産もまた、シューシダス同様に白人に管理されたものとして描写されていることである。67歳のルーカスは、トミーズ・タールの息子の1人で、マッキヤスリン農園の借地農である。繰り述べられた「遺産」を一時は請求するが、結局、それを使わないまま、彼名義の銀行口座に預金している(102)。帳簿上、ルーカスの口座は、その当時の農園主である43歳のキャロザーズ・ロス・エドモンズ(Carothers Roth Edmonds)のそれを上回っていると記述されているが、同時にそこには、「売店から金や食料を引き出そうとする際に、ロスを信用できるならば」という条件が付されている(34)。その後描かれる金貨探しのエピソードの中でも、ルーカスが埋蔵金を探すための探知機代金300ドルの引き出しを願い出たとき、ロスはルーカスの農作業に支障が出ることを危惧してか、金を引き出すことを頑として許さない(77)。言い換えれば、これは、管理システムが継続された農園では、キャロザーズの遺産を継承したルーカスの多額の預金もロスの恣意性に任されており、実態は把握できないということを仄めかしている。

このように、奴隷制時代と再建期以降、それぞれを生きた黒人の経済活動を比較してみると、1865年の南北戦争の終焉をもって社会の構造転換が図られて以降の時代は、それ以前とは全く異なる期間として捉えられてきたが、黒人搾取のシステムを継続させていたという意味で、実質的に奴隷制時代と大差はなかったことが証明される。ロスがルーカスの経済活動を制限することは、結

果として、黒人の生産に依存し、白人の旧時代的
利益を守ることに同義である。つまり、『行け、
モーセ』のテキストに描かれる異人種間の金銭の
循環は、歴史に基づいた白人優位の経済構造を正
確に映し出しているのである。

2 | 性搾取の抵抗としての黒人の経済活動

ルーカスは、密造酒醸造や金貨探しという「経
済活動」を行うことによって、前節で分析した農
園経済システムへの抵抗を試みている。彼がそれ
らの行為に熱中する姿は、一見すると、資本主義
経済に囚われた利益追求主義と見える。しかし実
は、フォークナーがこの物語のルーカス像に明示
するのは、よりシリアスな経済行為である。彼は、
奴隷制という旧時代の経済活動がポストベラム
期以降の黒人に、いかなる不利益を与えている
かを、白人農園主の眼前に突きつけている。それ
らの不利益の中でも、彼の妻、モリーが白人家
長に強いられてきた屋内労働の経緯は、とりわけ
繊細な心理描写とともに描き出されている。本節
では、ポストベラム期の異人種関係が、疑似的な
「家族」関係の形式で、一層複雑さを増している
様子を考察したい。

ルーカスは、「火と暖炉」のエピソードの中で、
類まれなる経済的エイジェンシーを発揮する。作
中、農園内で偶然見つけたコインをきっかけに、
彼は白人の祖先が埋めたと考えられる埋蔵金を探
し始める。その過程で、メンフィスから呼び寄
せた白人セールスマンから300ドルの金貨探知機
を購入しようとするが、ロスの手許に得られず、
300ドルを用意することができない。そこでルー
カスは、ロスが所有する騾馬を担保に探知機を借
り、それによって見つけた埋蔵金で、後から騾馬
を買い戻すことをセールスマンに提案する。セー
ルスマンとの交渉の中で、ルーカスはイカサマ行
為を行いながらも、正統な法的手続きを経て探知
機の所有権を手にするのである。

『行け、モーセ』を経済学的な観点から分析す
るジョン・T・マシューズ (John T. Matthews) に
よれば、ルーカスのこのような経済活動のやり

方は、黒人が経済的に詐取されてきたものを取り
戻そうとする精神、つまり、「帳簿のメンタリ
ティ」(ledger mentality) に基づいているという
(Matthews, 1996: 32)。言い換えればルーカスは、
搾取されてきた黒人という自らの立場に鑑み、白
人との関係の中で、利害の帳尻あわせを試みるの
である。

ルーカスのそうした、いくなれば「出納簿精
神」とも呼べる思考法を念頭に置き、探知機取
得における騾馬の借用という行動を考えてみた
い。その騾馬は市場に出せば高値がつくにも拘
わらず、ロスが長い間売らずに所有し続けている
マッキヤスリン家の動産であり、また、アリス
・ベン・ボルト (Alice Ben Bolt) という人間
の女性のような名前を付けられている。ルーカ
スがアリス・ベン・ボルトをセールスマンとの交換
行為のために無断で借り出したことは、単なる利
益追求の手段ではなく、白人農園主の行為の模倣
という、実に示唆的な意味を持つのではないだろ
うか。

「火と暖炉」第1章において、ルーカスは、若き
日に白人家長によって妻を借用されたことを忘れ
たことのない記憶として回想している。それは、
物語現在から43年前の1898年にマッキヤスリン
農園で起きた出来事である。同年の3月、モリー
とルーカスは初めての息子、ヘンリー (Henry)
をもうける。同年8月、当時の農園当主であった
ザック・エドモンズ (Zack Edmonds) とその妻
の間にも息子が生まれるが、その際、ルーカスと
モリーは、嵐の中を白人家庭へと呼びつけられ、
そのお産を手伝わされる。モリーが家で白人の妻
のお産を助けている間、ルーカスは洪水の中、決
死の覚悟で医者を呼びに行く。そして白人の家に
戻ったルーカスが目の当たりにしたのは、産褥死
した白人の妻と、無事に生まれた赤ん坊のロス、
そして、すでにその家に「備え付けられて」し
まった自身の妻の姿だった (Faulkner, 1990: 45)。

労働にまつわる人種問題からフォークナー諸
作品を読み解くリチャード・ゴッデン (Richard
Godden) によれば、モリー借用のエピソードは、

ポストベラム期においてもなお、白人が黒人の労働力を当然のように徴用可能と見なしていたことを示唆している (Godden, 2007: 62-3)。実際、その日を境にして、モリーは、白人家庭の家事と育児を行うことを余儀なくされた。農園の「乳母」としての役目を果たすようになったモリーは⁷、その後、異人種間の擬似的な兄弟関係の仲介者としての役割を果たすこととなる。物心ついた頃にはモリーに連れられて日常的にヘンリーと行動を共にしていたロスにとって、白人家庭と黒人家庭は、「交換可能な」場所となっていた (Faulkner, 1990: 107)。フォークナーは、『行け、モーセ』の複数のキャラクターに、彼らのような異人種の兄弟という設定を与えている。ヘンリーとロスのそれぞれの父親、ルーカスとザック (111)、あるいは、モリーと彼女が生まれた白人家庭の娘、ベル・ワーシャム (Belle Worsham) もまた、幼い頃は兄弟/姉妹のように過ごしていたとされている (357)。

フォークナーが初めてその異人種の兄弟という設定を作り出したのは、『征服されざる人々』 (*The Unvanquished*, 1938) においてであった⁸。しかし、同小説には、兄弟関係の媒介者となる黒人乳母はほとんど登場しない。平石は、1938年のフォークナーが、黒人女性の「特別な影響力」に気づいていなかったとは考えられないので、「ユーモラスな冒険」をあつかう『征服されざる人々』において、作家が「それ [黒人乳母] を扱うことは危険だと判断」し、「彼女を無視することに決めた」と論じている (平石, 2003: 215)。つまり、言い換えれば、『行け、モーセ』において緻密に描かれているモリーの存在は、フォークナーが「黒人乳母」の問題を真剣に描き出そうとしていたということの意味している。作家が同小説において、人種とそのジレンマの問題に取り組んでいたことは、すでに多くの研究者によって議論されてきているが (Porter, 2007: 162; Roberts, 1994: 57)、とりわけ、黒人乳母という存在に対して、親愛の情と罪責感という二面的な感情を持っていたのではないだろうか。

作中、2つの家庭の大量の屋内労働に従事するモリーが、優先して腕に抱くのは、自らの子、ヘンリーではなく、白人の子、ロスである。その様子をルーカスに責められたモリーは、「この子 [赤ん坊のロス] を、おいてくることは、どうしてもできなかっただ、おめえさまにもわかるべ、どうしても連れてこなきゃなんなかっただよ！」と悲痛な声で叫んでいる (Faulkner, 1990: 49)。この台詞には、ポストベラム期の黒人女性もまた、奴隷女性同様、生き延びるための究極的な選択を日常的に迫られていたことが示されている。同じ章の中で、モリーが借用されて以来、手入れがおろそかになった黒人家庭の様子が、ルーカスの視点から描かれている。それは、モリーがこのとき優先すべきものが、何よりも白人家庭であったことを暗示している。つまり、彼女が家事をしながら、片方の腕に一人だけ赤ん坊を抱けるとするならば、それは、常に見守らねばならぬ白人の子以外にはありえなかったということである。ロスとヘンリーの仲介者として強い存在感を示すモリーは、白人の息子との間に否応なく親密関係を築いていったが、それは、子育てという無賃のケア労働を、黒人女性が強要されていたことを意味している。

南部の人種体制から見れば、ザックによるモリー徴用のエピソードは、まさに、ルーカスによる騾馬の調達論理を示している。フォークナーは、ルーカスの経済活動のエピソードとは別の挿話の中で、アリスという名前が、モリーを徴用していたザックの母親の名前であることをさりげなく書き添えている (264)。老齢になったルーカスが、無断でロスから借り受ける騾馬の名が、彼の祖母に当たる白人女性と同じであるという設定は、作家の意図したものだだろう。モリーが自分の子を差し置いて、無賃の母親業をしていたにもかかわらず、ロスの記憶にあるのは搾取への罪責感ではない。彼はモリーに今なお愛着し、その視点は、産みの母がいない彼の「唯一の母親」であり、「見返りを期待することのない献身と愛」を与えてくれた女性として、モリーの姿を捉えてい

る(113-14)。一方、若き日のルーカスは、2つの家庭を行き来する妻の背中を見つめながら、「黒い人間が白い人間に、どうかおらの黒いかかあと寝ねえでくれと、どうやって頼むことができるちゅうだ？」と自問する(58)。果たして、1941年の物語現在でさえ、老齢のルーカスは40年以上前に妻を取られた敗北感をいまだ拭い去ることのできないためか、妻と目を合わすことすらできない(41)。ここに込められたルーカスの性的な焦燥感は、黒人を自在に徴用した農園システムへ「補償」を求める「出納簿精神」の位置づけが、より明らかにしているのではないだろうか。つまり、ロスの騾馬を身勝手に借り受けたルーカスの経済的エイジェンシーは、黒人の使役で殖産を果たしてきた白人の論理を反復する。そのことは、しかし翻って、ポストベラム期の白人家長に経済的な「補償」を求めるだけでなく、それに付随する過去の性搾取を「記憶せよ」という核心を伝えているのである。

3. 「補償」の再定義の可能性

本章では、ここまでの議論を踏まえつつ、最後にモリーのエイジェンシーの考察から、フォークナーが物語に書き込んだ奴隷制の制度的欺瞞に対する「補償」の意味を明らかにしたい。白人が一方的に供与する補償金を、モリーが受領拒否するという筋書きに着目し、彼女の行動の中に、再建期以降の黒人女性の倫理的思想を読み取っていく。本作においてフォークナーは、ロスやルーカスの内省的な語りを多く描く一方で、モリーによる語りを一切記述していない。しかし、経済的抑圧が残存する農園の状況を踏まえて、モリーのふるまいを読み込んでいくと、ルーカスとは別の思考から、彼女が農園経済への抵抗を試みる様子が窺える。モリー、ルーカス、そしてロスによるそれぞれのふるまいを考慮しつつ、補償金が黒人にとりどれほど有効(あるいは無効)な解決策で

あったのか、そして、無効なのであれば、いかなる補償を提示しうるのかという、『行け、モーセ』の提起する問題を明確にしたい。

1 | 2つのエピソードにおけるモリーのエイジェンシー

本節では、「火と暖炉」と「行け、モーセ」における2つのエピソードを考察する。それにより、モリーのエイジェンシーを明らかにする。

(a) 金貨探しに伴う離婚騒動

騾馬の徴用によって探知機を獲得したルーカスは、義理の息子のジョージ・ウィルキンズ(George Wilkins)とともに、夜な夜な埋蔵金探しに夢中になる。しかし、その様子を案じたモリーが、唐突にルーカスとの離婚をロスに申し出るのである。それまでのエピソードでは、モリーはルーカスの回想シーン以外ではほとんど登場せず、登場しても主体的な行動を見せてこなかったが、「火と暖炉」の最終章で、突如としてその存在を前景化させる。しかし、彼女の動機は非常に曖昧なものだ。彼らの離婚を食い止めようとするロスが言うように、刈り入れの時期でないならば、夜通しルーカスが農園を歩き回るくらい大した問題ではない。モリー自身、ルーカスが農作業をしないのであれば、自分がやれば良いと考えている。では、彼女が離婚を申し出てまで、ルーカスの金貨探しが嫌悪した理由は何だったのか。

モリーの離婚宣言を受け、ロスはルーカス呼びつけると、3人で話し合いの場を設ける。ルーカスは探知機をジョージに譲ってしまえばいいのではないかと提案するが、モリーはそれさえも断固拒否する。彼女は、探知機を触った者がかかってしまうという「神様の呪い」を、ジョージの妻、つまり、彼女の愛娘、ナット(Nat)に与えたくないのだという(118)。ロスはモリーの言葉を、「一滴の汗も流れていない、少なくともけっして自分自身のものではない1000ドルの金」をジョージとナットが取得してしまうことへの彼女の恐れとして解釈する(119)。確かに、労働

することなく埋蔵金という形で利益を得てしまうことで、彼らの人生はそれに依存してしまう。年若く貧乏な娘夫婦に対して、モリーがそのような懸念を感じるのは当然のことであるかもしれない。

しかしながら、ロスの推測は一理あるとしても、モリーの埋蔵金探しの拒絶に示唆されるのは、それだけではないように思われる。考えられる可能性として、ルーカス、あるいは、ジョージが埋蔵金を取得することによって、彼らのルーツを抹消してしまうことへの拒絶があるのではないだろうか。ルーカスが農園内で探知機を使って掘り当てるかもしれない金貨とは、結局のところ、マッキヤスリン家の財産の一部だと考えられる。すると、それを得ることは、まさに、元祖キャロザーズが目論んだ「遺産」という名の償いを受け取ることにほかならない。奴隷制時代の性搾取によってユースとトマシナが受けた痛みは、子育てや屋内労働という形に変化して、ポストベラム期のモリーに引き継がれている。ルーカスの埋蔵金の取得は、モリーにとって、彼女や祖先たちの無賃労働に対する白人の弁済であり、ひいては、白人家長の搾取の記憶の抹消である。ルーカスの金貨探しとモリーの離婚騒動は、お互いに対立し合うものとして描かれている。だが、2人のふるまいの動機となるのは、ひとえに、ポストベラム期においてもなお残存していた経済的、性的搾取を明らかにし、それを新南部を生きる白人の記憶に留めておくことだったのではないだろうか。

(b) ブッチの死

『行け、モーセ』の7つ目の物語として収録されている「行け、モーセ」には、「火と暖炉」の1年前、1940年に起きたと推定される出来事が描かれている。この物語では、モリーとルーカスの孫であるブッチ・ビーチャム (Butch Beauchamp) が、町にある白人の店に押し入った罪で死刑に処される。ブッチのエピソードには、この小説でたびたび問題視されてきた白人優位の経済構造が見てとれる。同時に、孫の身を案じて行動を起こす

モリーの描写には、自らの力を総動員して南部で生存領域を獲得しようとする黒人女性像が見い出される。

ジュディス・バトラー (Judith Butler) は、抑圧を受けてきた様々なマイノリティたちのエイジェンシーを概念化している。バトラーによれば、エイジェンシーとは、完全に「自律した」主体に代わる概念である (Butler, 2004: 26)。私たちの身体は、公的な場で暴力にさらされるリスクを負っているが、それゆえにこそ、主体位置を構築し得る (ibid.)。つまり、主体性ではなく、一種の受動性をもって生成するのがエイジェンシーという存在の位相であるが、これこそは、南部農園を生き抜く黒人のふるまいを説明しうる概念である。モリーの例で言えば、彼女は、自ら選択したわけではない白人の息子の「乳母」役を務めあげた結果、精神的、身体的抑圧を受けてきた一方で、農園社会を生き抜くためのエイジェンシーを獲得している。

「行け、モーセ」には、老齢のモリーがエイジェンシーを行使するさまが描かれている。ブッチが警察に捕まったことを知ったモリーは、白人弁護士、ギャヴィン・スティーブンス (Gavin Stevens) のもとに足を運ぶ。二人の会話から、モリーがマッキヤスリン農園を出て、実家のワーシャム (Worsham) 家にいることがわかるが、翌年の出来事である「火と暖炉」の時点でもまだ、モリーはマッキヤスリン農園での生活を続けている。つまり、ここで彼女が「農園を出た」としているのは、この事件を解決するための一時的なものであると見なしてよい (Faulkner, 1990: 353-54)。マッキヤスリン農園と実家のワーシャム家を自由に行き来することのできるモリーの様子は、2つの家庭の労働に従事していた際、流動的にならざるをえなかった彼女の身体とは逆の、介入する者の主体的行為性を得ているように思われる。老齢のモリーは、自身の立場と屋内労働によって取得したであろう能力を最大限発揮し、ブッチの事件を解決すべく行動している。

モリーはブッチの逮捕について、「ロス・エド

モンズがおらのベンヤミンを売っちゃっただ。あの子をエジプトに売っちゃっただ」とステーブズに説明している(353-54)。彼女が、自身の育ててきたロスを奴隷主のイメージに据えたうえで、ステーブズを「法律の人」つまり、法制度の専門家と認識して孫息子の救出を依頼したことは、短編「行け、モーセ」の文脈を超え、『行け、モーセ』全体で描かれる奴隷制を引きずるように常態化されていた農園システムの制度的欺瞞への訴えであるのではないだろうか。その後、モリーの必死の訴えに応じて、ステーブズはブッチを探し、その死がわかると彼女の希望に沿う葬儀を執り行うため、町の白人たちから寄付金をかき集める(359)。一方で、ステーブズがモリーを訪ねても、彼女は彼と目を合わせようともしない(362)。ここには、人種間の溝を埋めることの難しさが表れているが、しかし、ステーブズの行いには、モリーのエイジェンシーに押されて、白人本意ではない「償い」の先駆けを試みる様子が見て取れるのではないだろうか。

2 | 経済的ではない「補償」

ここまで論じてきたように、奴隷制の問題を経済的補償によってのみ解決することは、不可能である。しかし、フォークナーが『行け、モーセ』において示したのは、「補償」の完全な不可能性ではない。ルーカスやモリーが織りなす物語には、ポストベラム期に残存する法制度を突き崩しうる、黒人の経済的技量や生存戦略が描き出されている。本稿の最後に提案したいのは、モリー、ルーカス、そしてロスのふるまいから読み取りうる新たな「補償」の可能性である。

以下に、1941年時点で、ロスの視点から語られるモリーの姿を見てみよう。

牝馬に乗って作づけを見てまわる際にその家のそばを通り過ぎ、彼女[モリー]がそのやせこけた顔を、口にくわえた陶器製パイプのよしの茎の吸口のあたりでしばせながら、ベランダに座っている姿や、あるいは裏庭で

洗濯桶や物干網のあたりを動きまわっている姿を見かけたものだったが、その動きはたいへん年をとった老人特有の緩慢な、痛々しげな動きで、年齢はエドモンズにとってさえも、ちょっと考えてみればエドモンズがはっきり知っているよりもはるかに高齢であるように思われたものだった。そして一月に一度は彼はきまっておいたって雌馬を柵につなぎ、煙草の入ったブリキ罐とやわらかく安価な彼女のお気に入りのキャンディの入った小さな袋を手にもってその家に入って行って、半時間ばかり彼女を訪ねたものだ。(96 下線部引用者)

43歳のロスの視点は、彼女の「やせこけた顔」や、「老人特有の緩慢な痛々しげな動き」、さらには実際より「はるかに高齢に思われる」という容姿を捉えている。作中たびたび描かれるモリーの老いた容姿が、彼女の長年の労働における精神的、肉体的疲労を示していることは明らかである。ロスには、彼女の疲弊した容姿の原因に少しも思い至ることはないのだが、「年齢はエドモンズにとってさえも、ちょっと考えてみればエドモンズがはっきり知っているよりもはるかに高齢であるように思われた」というような、ある種の気づきを見せている。ロスは、生まれたときから「母」であったモリーの老いに、このとき初めて気付いたようだ。そのきっかけは、長年農園で抑圧を受けてきたルーカスやモリーが、1940年代に至り、経済的、性的エイジェンシーを獲得し、その運用を達成したことだったのではないだろうか。つまり、黒人たちのふるまいが、人種的不平等に無感覚であったロスに、黒人の経験した抑圧の記憶を認識させたのである。

さらに、ここで指摘しておきたいのは、下線部のように、ロスが月に一度、「煙草」と「モリーのお気に入りのキャンディ」を携えて彼女のもとに通い、半時間ばかりの会話をしていることである。煙草や砂糖は、南部プランテーションの主要農産物である。それを農園で搾取を受けてきた黒人女性に届けるという行為は、作家フォークナー

にとってみれば、政治的意味のこもった設定であったはずである。それは、一見するとロスからモリーへの無邪気な愛着ゆえの行為であるように見えるが、彼女の老いた容姿と併置して描写されることによって、図らずも、モリーやルーカスが望んできた、搾取の記憶を呼び起こさせる。前節で論じたブッチの一件のように、モリーはこのときすでに、限られた領域の中ではあるものの、自らのエイジェンシーを行使することができている。月に一度というスパンで訪問してくるロスに対して、モリーは、「赦し」を与えることを延期しつつも、彼の「弁済」の発展性を見守っているように思われる。これは、いまだ見ぬ、白人と黒人の相補的な「補償」の一局面と捉えられるのではないだろうか。

一方で、モリーとは異なり、「出納簿精神」を持つルーカスは、ロスのこのような行動に対立的である。ルーカスの探知機を手放すという決断によって離婚騒動が収束するとき、彼もまたモリーへ「やわらかいキャンディ」を渡している(125)。これは偶然の一致であろうか。ロスがモリーに煙草とキャンディを渡しに通っていることを、ルーカスが見ているという記述はない。しかし、月に一度という頻度で通ってくるロスの行動を、ルーカスが認識していた可能性は高い。驕馬のエピソードと同様、ルーカスの黒人男性としてのプライドが引き起こした、白人家長に対する対抗的なふるまいとして捉えることはできないだろうか。だが一方、ルーカスにキャンディを渡されたモリーの反応は、描かれていないため、黒人の夫婦の間に和解が生まれていないことも明白である。

ルーカス、ロス、そしてモリーの間で交わされる金銭以外の交換行為には、奴隷制の歴史の解決の途を示そうとするフォークナーの「補償」に対する問題意識を読み取ることができる。一方で、彼らの思想の相違、あるいは利害の競合が引き起こされているように、この問いが、たちどころに解決されるものではないことも、同小説には確実に表されている。だが、『行け、モーセ』の7つの

物語に多面的に描かれてきた異人種間の不平等な金銭授受のエピソードの応答となりうる、一進一退する三者のやり取りは、奴隷制の余波を生きる白人と黒人の——この場合、性搾取によって形成された異人種の血族の——相克のうちに成立した奴隷制の「補償」の可能性を示唆しているのではないだろうか。

注

- 1 フォークナーは、20世紀米国を代表する南部白人作家である。故郷であるミシシッピ州オクスフォードをモデルとした架空の土地・ヨクナパトーフア(Yoknapatawpha)を舞台にした一連の作品を生み出し、1950年にノーベル賞を受賞した。その作品群の一つである『行け、モーセ』は、奴隷制時代から1940年代にわたる南部農園の家系、マックスリン家にまつわる7つの物語、「昔あった話」(“Was”)、「火と暖炉」(“The Fire and the Hearth”)、「黒衣の道化師」(“Pantaloon in Black”)、「昔の人たち」(“The Old People”)、「熊」(“The Bear”)、「デルタの秋」(“Delta Autumn”)、「行け、モーセ」(“Go Down, Moses”)、によって構成されている。同小説は、とりわけ黒人表象の突出した豊かさから、「イデオロギー的な意味合いにおいて最高峰」との評価を得てきた(Davis, 1983: 239)。
- 2 諏訪部が示した「古典の書」とは、フォークナーと同年生まれの南部作家、リリアン・スミス(Lillian Smith)の1949年の作品、『夢を殺した人たち』(Killers of the Dream)である。同作には、南部黒人への「償いの金」というテーマが描かれている(諏訪部, 2017: 269)。
- 3 ジェファソンは、子供を産む黒人女性の価値の高さをはっきりと意識していたとわかる言葉を残している。奴隷解放論者の大統領ではあったものの、ヴァージニアの大部分の農園主と大差なかったと考えられる(西川, 2014: 158)。
- 4 Monticello.org参照。
- 5 フォークナーは、彼を育ててくれた黒人乳母のキャロライン・バー(Caroline Barr)に、『行け、モーセ』の献辞文を捧げている。多くのフォークナー研究者たちが、モリー・ビーチャムは、バーをモデルにして作られたキャラクターであると指摘している(Blotner, 1986: 10; Roberts, 1994: 53; Early, 1972: 106)。
- 6 1807年に購入されたとされるユニスの650ドルという値段は、当時の奴隷市場において高価なものであった。現在の金額で言えば、14,000ドル以上に相当する(Eliassen)。
- 7 アメリカ黒人の歴史を記したベンジャミン・クォールズ(Benjamin Quarles)によれば、南部農園で最も待遇が良かったのは屋内奴隷、その中でも1番にあげら

れた例は「黒人乳母」(“mammy”)であった(Quarles, 1964: 69)。

- 8 『行け、モーセ』の後に出版された作品を挙げれば、『墓地への侵入者』(*Intruder in the Dust*, 1948)は、『行け、モーセ』と繋がるテーマを扱う小説であり、ルーカスやギャヴィン・スティーヴンズが再登場する。スティーヴンズの甥であるチャールズ(チック)・マリソン(Charles Mallison, Jr.)と、彼の黒人の付き人であるアレック・サンダー(Aleck Sander)という黒人少年は、同い年として設定されている。同小説には、チックとアレックが黒人家庭で黒人の母親の作った食事を無邪気に食べている様子が描かれている(Faulkner, 1948: 11-2)。彼らの間にもロスとヘンリーに類する黒人の母を媒介とした兄弟関係が形成されているのは明らかであるが、やはりここでも黒人乳母の存在は、あまり前景化されていない。

引用文献

- Blotner, Joseph. 1986, “William Faulkner: Life and Art.” *Faulkner and Women*, edited by Doreen Fowler and Ann J. Abadie, Mississippi UP, pp. 3-20.
- Butler, Judith. 2004, *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*. Verso. 『生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学』2007, 本橋哲也訳, 以文社.
- Davis, Thadious M. 1983, *Faulkner’s “Negro”: Art and the Southern Context*. Louisiana UP.
- . 2003, *Games of Property: Law, Race, Gender, and Faulkner’s Go Down, Moses*. Duke UP.
- Early, James. 1972, *The Making of Go Down, Moses*. Southern Methodist UP.
- Eliassen, Alan. 2019, “Historical Currency Conversions.” *Frink Server Pages*, futureboy.us/fsp/dollar.fsp?quantity=650¤cy=dollars&fromYear=1808. Accessed 2 Jan.
- Faulkner, William. 1948, *Intruder in the Dust*. Random House.
- . 1990, *Go Down, Moses*. Vintage International. 大橋健三郎訳『行け、モーセ』1973, フォークナー全集16, 富山房.
- Godden, Richard. 2007, *William Faulkner: An Economy of Complex Words*. Princeton.
- Matthews, John T. 1996, “Touching Race in Go Down, Moses.” *New Essays on Go Down, Moses*. Cambridge UP.
- Porter, Carolyn. 2007, *William Faulkner*. Oxford UP.
- Quarles, Benjamin. 1964, *The Negro in the Making of America*. Collier Books.
- Roberts, Diane. 1994, *Faulkner and Southern Womanhood*. Georgia UP.
- “Thomas Jefferson and Sally Hemings: A Brief Account.” *Monticello.org*. 2 Jan. 2019 www.monticello.org/site/plantation-and-slavery/thomas-jefferson-and-sally-hemings-brief-account.
- 諏訪部浩一, 2017 『アメリカ小説をさがして』松柏社.
- 新納卓也, 2016 「家系という『呪い』——フォークナーの家系小説」『フォークナー第18号』日本ウィリアム・フォークナー協会編, 松柏社, pp. 78-94.
- 西川秀和, 2014 『トマス・ジェファソン伝記事典』, 大学教育出版.
- 平石貴樹, 2003 『小説における作者のふるまい——フォークナー的方法の研究』松柏社.
- . 1993 『メランコリックデザイン——フォークナー初期作品の構想』南雲堂.
- 本田創造, 2000 『アメリカ黒人の歴史』岩波新書.
- 日本ウィリアム・フォークナー協会編, 2008, 『フォークナー事典』松柏社.

